概　　説

今回の改定レッドデータブック作成では、福井県で記録のある国レッドリスト掲載種、近隣県での選定種、調査員の 2002 年以降の調査記録を加え、両生類の調査経験の豊富な人材を新たに集め、重点的に種、調査地を決め、平成 25（2013）年から平成 27（2015）年まで実施した。この重点調査等を基礎として、環境アセスメント調査データの活用を付記して、第 1 版より客観性を高めている。

日本における両生類の種類は、現在のところ、遺伝子解析が進み、有尾目 3 科 31 種、無尾目 6 科 49 種が知られている。2002 年版福井県の絶滅の恐れのある野生生物ー福井県レッドデータブック（動物編）作成時より、その後の調査で、アカガエル科のナガレタゴガエルの 1 種が追加確認され、現在では福井県の生息確認数は、有尾目 3 科 6 種で変わらず、無尾目 4 科 14 種となっている。

天然記念物のオオサンショウウオは、過去、福井県内各地に生息が確認され、近年では昭和 50 年代の福井県嶺南地域の関根川、佐分利川上流川上、耳川でも成体が確認されているが、幼生、幼体，産出卵嚢の記録はなく、京都府からの移入種との風聞が多く、以後現在まで生息確認情報がない。護岸工事、砂防堰堤工事、集中豪雨による河川生息環境悪化で生息しているものとは思えない。調査現状分析から県域絶滅としている。

種の保存法掲載種で絶滅危惧ＩＡ類のアベサンショウウオは、第 1 版発行以来、福井県北部地域だけでなく、県ＲＤＢ 補完調査により越前市西部地域（越前町を含む）一帯に広く生息していることが判明し、その後の環境省請負業務の保護増殖事業での調査により、福井県嶺南東部地域（2007）、またこれから 7.7Km 離れた滋賀県境部の標高 360m の山地開拓地湿地（2012）でも生息が確認されてきている。産卵地割合で、福井県は日本のアベサンショウウオの 93％が生息する一大生息地である。しかし、人里近くの湿地と山麓帯に生息するため、生息域の宅地造成、埋め立て、道路開発、用排水路整備、休耕棚田管理放棄、山麓の間伐材搬出道路建設等で生息環境が悪化し、毎年、軽易な整備をしないと、漸次生息地や個体群は縮小している。

福井県の名古屋種族、岡山種族の 2 系のダルマガエルがナゴヤダルマガエルに統一された。福井県嶺南地域の広域農道西街道建設時の残地が管理放棄地になり、生息地の 2 か所が消滅している。しかし、三方五湖から小浜市にかけての平地に広範囲の生息が確認されているが、個体群の減少とトノサマガエルの交雑が心配されるので、県域絶滅Ⅱ類としている。

アカガエル科のナガレタゴガエルは隣県に生息が確認され、福井県での調査が望まれていた。川内一憲氏らにより（2009 年）、勝山市標高 510 ～ 8100mの滝波川支流で生息が確認され、加越山地や奥越・越美県境の源流域に生息することが確認されている。生息地の林床の乾燥化、幼生生育水質汚染など生息詳細が不明であるため県域準絶滅危惧種に選定している。また、環境省ＲＤＢで掲載されたトノサマガエル、アカハライモリも耕作地周辺が圃場整備、用排水路の整備などで減少し、里地に生息するアズマヒキガエルも、急激に生息確認地、産卵池や湿地が減少しているため要注目としてリストアップしている。

表　2016 年福井県改訂版レッドリスト（両生類）の選定種数とその増減

ランク	第 1 版リスト	改訂リスト	増　減
県域絶滅	―	1	＋1
県域絶滅危惧Ⅰ類	2	1	－1
県域絶滅危惧Ⅱ類	1	1	0
県域準絶滅危惧	1	4	＋3
要注目	1	3	＋2
地域個体群	―	―	―
合　計	5	１０	＋5

（長谷川 巖）